

「『だいじょうぶだよ』と、だれかにそうひとこと言ってもらいたいときがある。無力感に支配され、恐れの中に飲み込まれそうなとき。人は、わらをもつかむ思いで、安心できるそのひとことを求めている。しかし、ではいったい、何を根拠に『だいじょうぶ』なのか。もうだめ、というときに、なおも語られる『だいじょうぶだよ』は、どこから生まれてくるのだろうか。それは、そのひとことを必要としているその人の痛みを、すべて知っている方からきた、究極の『だいじょうぶだよ』である。それが、人間を超えたところからきたのでなければ、何の意味があるだろう。（そうでなければ）“だいじょうぶじゃない”ことを、みんな知っているのだから。どんなに偉い人がだいじょうぶですよと言ったとしても、それは、結局は不完全なるこの世の『だいじょうぶ』なのであって、ちっとも安心できないではないか。世界を生み、このわたしを生んだ方からくる究極の『だいじょうぶだよ』。それは、世界が産声を上げたときからずっと響いている」。晴佐久昌英神父の言葉です。

本日の聖書箇所には、イエスが宣教のために 72 人を任命し、町や村に派遣する場面が記されていました。派遣するにあたってイエスは、「狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」（3 節）、「財布も袋も履物も持っていくな」（4 節）、泊まる場所も食べるものも、与えられるままを受け取り、自分からあれが食べたい、ここに泊まりたいと「家から家へ渡り歩くな」（7 節）と語られました。大変厳しい言葉です。しかし、別の見方をすれば、「それらのことは皆、私が責任を持つ」とイエスが言っていることでもあります。

「収穫は多いが、働き手は少ない」（2 節）とイエスは語ります。すでに神ご自身が、ここに、あそこに、必要な恵みを備えてくださっていることを示している言葉です。後は、私たちがその主イエスの約束に信頼することが求められています。その信頼が薄れていくなかで、私たちの不安や恐れは助長され、自らその身を苦しめているのかもしれませんが、もちろん、私たちの内に「だいじょうぶ」の根拠はありません。でも、主イエスがその「だいじょうぶ」の根拠になってくださる、その責任を負ってくださる、その約束をしてください。誰よりも人間的な痛み、苦しみ、叫びを味わい尽くされた十字架上のイエス、そこから語りかけられる 100%の「だいじょうぶだよ」が、何も見えない恐れの中からは、私たちを生きる側へ、人を愛する側へと引っ張り出します。

（文責：望月達朗牧師）

